
Battle Days !

三年寝太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Battle Days!

【Nコード】

N1103Y

【作者名】

三年寝太郎

【あらすじ】

どうにもあと一步が踏みだせない！そんな状態で何年も留まり続け、思わぬ形で恋に破れた青年、黒田踏樹くろむぎは、河川敷の橋の上で溜息を吐いていた。

そんな折りに、何を勘違いしたか、橋から川を眺めていた踏樹に駆け寄った一人の少女が、必死に踏樹に語りかけるのであった。

「私がフムキに、生きる目的を与えてあげる」

ひよんなことから転がり出したストーリー。そして二人は、「目的」に向かって戦い、邁進していくのであった。

新カードゲーム「Battle Days」。これは、世代を越えて出会った彼らが、それを通じて成長していく、そんな青年・少女の物語。

時代背景・1990年。

プロローグ

『愛とは、一体何なのだろうか』

これぞ人類最大の命題であり、ヒトを人たらしめる重要な要素である。

と、まあ。何気に尊大な語り部からここは初めているのだけれど、実際問題、俺という人間はそんな大層なものはご存じではない。

愛なんてわからない。そこに到達するまでの過程である、「恋」ですらどんな風に取り扱ったらいいのかわからない癖に、そんなものがわかるものか。

嚴重取扱い注意。

恋と欲望その他もろもろ。

青春というものは、危うきものなり。

一步一步と進むのが、堪らなく楽しくて。でも結末の先を見るのが本当に怖くて。

先を見るより今が良い。自分が崩壊してしまいそうだから。

そんな風に逃げて逃げて、逃げた自分。そんな人間に訪れる最後の通知は、とても淡白なものである。

枯れた心にゃ、花が咲く！

教授の声がやけに響く少し狭い大学の講義室で、ただそれを聞き流すだけの時間を今俺は送っている。

今を思えば何とも言えない進学であった。

成りたい職業も無し。成したいことも無し。

ただ漠然と、大学という爽やかな響きに釣られ、これ以上学びを取りたくないと思いつつもその上働きたくもないという怠惰な感情に心を奪われ、今ここにいます。

受験というほどの受験をしたわけでもない。本当にただ、なんとなく。

それで今、教授の尖った口から放たれる、詰まらない講義の解説を。つらつらと右から左へと通り抜けていくがごとく聞き流しているという事である。

サークルにも入っておらず、大学の運営に携わる特別な何かをし

ているわけでもない。

だがそんな俺にも一つだけ。

一つだけ青春の香りを感じさせてくれるものを持っている。

俺は今、恋をしているのだ。

相手は二つ下の、幼馴染の現役女子高校二年生。名前は能美坂^{のみやか}すみれ。

俺がすみれちゃんと初めて出会ったのは、俺がまだ小学六年生の頃だった。

桜の舞い散る季節に、我が家の三つ隣の家に引っ越してきた彼女は、転入生として俺の通う小学校に通い始めた。

さて家が近いとなればその登校の際に高学年は低学年を引き連れて学校まで引率をせねばならないという、そんな地域の決まりがあったもので。

自分の地域にはもう低学年がないが故に毎日一人で登校していた俺にはその当時小学四年生だったすみれちゃんのみが引率の対象であった。

自分の地域には後輩がいなくって、自分が先輩なるところなんて想像もしていなかった時に突然現れた唯一の後輩だったから、当時の俺はもう本当に可愛かった。

「おはようございます、先輩！」と、毎朝笑顔で語りかけてくれるその後輩を大切にしてやらずに、何が先輩か！

そんな風に思っていた俺は、小学校を卒業してからも朝の登校時はすみれちゃんと一緒に登校をしていた。

中学校までの道のりに小学校があるものだから、自分としても全く困ることは無いし、何よりもすみれちゃんと一緒に居られることが本当に楽しかったから。

さてそんな風に過ごしている内にすみれちゃんが小学校を卒業して中学一年生になり、そして俺が丁度中学三年生になった頃か。

入学したてのすみれちゃんの制服姿が余りにも可愛くて、「先輩。中学校に入っても、よろしくお願ひしますね」と彼女に笑顔で言わ

れた瞬間、気付いたのだ。

俺はすみれちゃんを好きになってしまっていたのだと。

その年辺りだっただろうか。毎年クリスマスに、彼女に何かしらプレゼントを上げ始めたのは。

ぬいぐるみやらネックレスやら服やら何やら。そんな物を毎年渡していたような気がする。

俺はすみれちゃん以外には全くもって興味が無かった。同学年の娘に告白をしたことも無ければ、したことも無い。

ただひたすらに、すみれちゃんを想っていたような気がする。

だがしかし、断じてストーカー紛いの事をしたことは無い。

中学校にすみれちゃんが上がってからは、俺がすみれちゃんと会うのも話すのも朝の登校の時だけだった。

そんな風にプレゼントを上げながらも、自分は、彼女にその気持

ちを伝えられずにここまで来てしまったのである。

もしも告白に失敗して、すみれちゃんと話も出来ないような関係になってしまったら。

自分というモノが壊れてしまいそうな気がして。

そうやって逃げ続けて、結局告白は言えずじまいで今に至っている。

だが、俺は決めていた。今年こそは、彼女にこの想いを伝えるのだ、と。

大学の授業等、今の俺にとってはただの子守唄でしかない。

出席を取る授業だけには出来る限り出席を取り、そうでない授業はその科目のレジュメ（所謂プリント）の確保を友人に頼み込み、それを受け取るという形で欠席を繰り返していた。

その時間帯を使って何をしているのかと聞かれれば、答えは単純。アルバイトだ。

せめて、俺の人生をかけた、告白と言う名の一世一代の大勝負には、それに相応しいプレゼントを用意したい。

そんな風に思う俺は、慣れないバイトとやらを始め、掛け持ちし、そしてそのプレゼントを買うための資金集めに精を出していた。

人間やれば出来るもので、散々叱られながらも着実に仕事を覚えていき、僅か二週間の間に大抵の仕事は一切の指示なしで熟せるようにもなっていた。

さて、ではどんなプレゼントを買おうかと悩む所だが、それは本人にそれとなく聞いてから決める方が良さだろう。

そろそろ残った最後のバーコード状の髪の毛も抜けるんじゃないだろうかとも思える頭をした教授の、間延びするような退屈過ぎる講義の声との別れを示すチャイムの音が、狭い講義室に響き渡った。

「では、これにて今日の講義は終了とします」

その声と共に、他の生徒も一斉に立ち上がり、退席していく。

俺もそれに倣い、鞆に筆箱やレジュメをつぎ込み、退席した。

大学の講義室を出て一息吐くと、白い息が目に見えた。 季節
は真冬、十二月。

二月の入りと比べればまだ寒さもマシであるのかもしいないが、それでも十分に寒い時期であり、もしも今来ている厚手のコートを脱いだまま外で一日寝てみたらそのまま死んでしまうのではなからうかと思う。

ふと上を見上げると、空は大分淀んでいた。

暗雲立ち込める、と言った様子の空模様が西の空に見えている。

この分だと、今日明日にもその雲が襲来し、大雨でも齎しそうだと考えた俺は、ここ数日の間には置き傘を鞆の中に常備しようと思いに決めた。

現在高校二年生であるすみれちゃんと出会う機会があるのは、日が暮れた後の帰り道のバス停付近だけ。

流石に小中高と一貫して彼女と登校が同じだったわけでは無く、馬鹿な俺とは違って県内でも屈指の進学校通学する彼女と出会う機会は、高校生であった時にもそこにしかなかった。

俺が通う大学は俺の実家にとっても近く、徒歩で通える。

実家通いの俺にとっては最高の立地であり、しかもすみれちゃんが下りるバス停が丁度その道の途中にある為に、その時間帯を間違えさえしなければ。

週に何度かすみれちゃんとバス停で会い、そこからお互いの家まで一緒に歩いて帰ることが出来ていた。

本日の講義は、もうない。

現在の時刻は19時丁度。このまま帰路に着けば、丁度彼女がバスから降りる時間になるだろう。

俺の心は躍った。

彼女の姿を見つけただけで、その日はずっと幸せな気持ちでいられる。その位に俺はすみれちゃんに惚れこんでいるのだ。

バスが着く時間に遅れては仕方がないので、少し急ぎ足で俺はバス停に向かう。

周りの家々を照らし出すイルミネーションがそんな俺の浮かれた心を映し出しているような気がした。

バス停に着くと、俺は腕時計を見る。首に巻き付けたマフラーが少し視界を遮るのが煩わしい。

時計の針が示す時刻は、バスが到着するであろう時刻の五分前。

早く彼女に会いたい。そんな気持ちが先行して、足が小刻みにリズムを刻みだす。

寒さによる震えとは違う、そんな待望の震え。数分が過ぎ、このバス停に向かうバスの姿が見えた。

道中とは違いこのバス停を照らし出しているのは一本の電柱だけであるので、向かってくるバスの明かりが目には辛い。

プシューと空気の音を鳴らし、ゆっくりとバスの扉は開いていく。

俺は知っている。ここで降りるのは、すみれちゃんだけ。

だから、今から俺がこのバスから目にするのは、彼女だけだ。

俺の姿を認めると、嬉しそうに暖かな手袋を身に着けた左手を振ってくれる彼女の姿が、とても愛おしい。

「先輩、今日は大学終わるのが遅かったんですね」

「うん、まあ。出席を取る授業があると、どうしてもサボれないからな」

やれやれとでも言いたそうな仕草で俺は両手を広げて見せる。

嘘だ。別にそうでなくても、彼女とここで会うためなら講義が何もない日でも大学に行き、勉強をしたりすることもある。

ただ、今日はたまたまそれが本当だったただけの話で。

「先輩を見ていると、大学って私がイメージしてたものよりもずっと大変そうに思えてきちゃいます。……でも、先輩とこうして会えるなら、少しくらい先輩に苦労して貰った方が嬉しいです」

なんて嬉しいことを笑顔で言ってくれるのだろうか、この娘は。

俺もすみれちゃんに会えるから、大学やバイトの疲れなんてこいで吹き飛んでしまっけどね。

と、思いきって言いたい所だが、残念ながら彼女の前では俺はそんな素直なキャラでは居られない。

悲しいかな、小学生の頃から身に着いた先輩気取りの雰囲気自分の中から抜けなくて、どうにもそこまでの態度を彼女の前では取ることが出来ないのだ。

そんな素直になれない俺の態度が、俺の告白を邪魔し続けた節もあるかも知れない。

「今日は、部活がいつもより早く終わっただけです。冬になると、どうしてもテニスは弾が見えなくなっちゃいますので、今日からは帰る時間も少しだけ早くなるみたいです」

「へえ、そうなのか。テニスねえ……。俺は大学に入ってからはサークルにすら参加してないからなあ。テニスをやる機会なんてなくなっちゃったし」

「でも、先輩がサークルに入ってしまったら敵う人なんていないかな
つちやいますから、それはそれで皆の為になってるのかもしれないませ
んよ?」

「はは、そりゃ買いかぶり過ぎ。それも中学の頃の話だし」

何とも数奇なことだろうか、俺にはテニスをする才能の種とやら
が宿っていたらしい。

かつて中学生だった頃は、硬式テニス中体連シングルの県で二
位という有り難い功績を手にしたこともある。

だがそれも突き詰めてみれば、すみれちゃんにカッコいい所を見
せたかったというだけなのだけれど。

決勝戦で俺が負けた時、俺以上に悔しがっていたのがすみれちゃ
んだったことも、今は良い思い出だ。

すみれちゃんの持ち出す話に相槌を打つ形で俺は彼女との会話を
進めていく。

すみれちゃんの話の聞いているだけで俺は楽しいし、彼女も俺が
話を聞いてくれることはとても嬉しいらしい。

だからいつものように、俺は嬉しそうな彼女の表情と声に魅了されながら帰路を歩んでいく。

こんな日が、ずっと続くと良い。そんな考えを持ち始めてしまったから、ついで言葉に出せなくなってしまった、彼女への告白。

その勝負に出るための、毎年の布石。そのプレゼントを、今回はかりはストレートに彼女に聞き出すことにしていた。

「今年のクリスマスプレゼント、何にしようかなって迷ってるんだ。いつもは俺が勝手に買ってきてるけど、今年はすみれちゃんの欲しい物は、すみれちゃんに決めて欲しい。大丈夫、どんな物でも買ってきてやる。なんたって俺は、時間の有り余りる怠惰な大学生だからね」

「え……？ 今年は、私が決めるんですか……？」

「そう。サプライズ的な楽しみ方は出来なくなるけど、その代わりに、今回ばかりはどんなものでも用意しちゃうから」

この今回が失敗すれば来年のプレゼントは無いかもしれないからな。

本当に今回ばかりかもしれないというネガティブな発想も片隅にあるのは否めない。

「そ、それじゃあ……、えっと、どうしよう、かな。………思い切ってみるのも、良いかも、知れないよね？もう、私も16になっただし、良いよね。が、頑張れ、私……」

すみれちゃんは俯いて小声で何か言っていたようだが、「どうしようかな」の言葉以降の音量は小さすぎて俺の耳には届かなかった。

だがその様子を見るに、どうやら欲しいモノは彼女の中で決まったようだ。

「あの、先輩。今年は……私、指輪が欲しいです」

彼女のその言葉を耳にしたこの瞬間。俺は更にバイトのシフトを増やすことに決めたのだった。

あの日から二週間が過ぎ、本日12月24日、日曜日。聖なる夜の前日となった。

毎年クリスマスのプレゼントは、24日にあげると決めている。

あれから、鬼のようにバイトに時間をつぎ込んだ。

授業と期末のテストが完全に終了して冬季休暇に突入したのが15日からだったので、その日からは寝て起きてまた眠るまで。

指輪を選ぶ時間を除いては殆どの時間がバイトに消えてしまった気がする。

バイトは兼業してるが故に、時間も制限が無い。

彼女の喜ぶ顔が見たい。ただその一心で、俺は辛い作業に打ち込んでいた。

彼女の喜ぶ姿を想像するだけで、それだけで俺の疲れは癒されるのだ。

もうひと踏ん張り。そうやって俺はこの二週間を耐えきった。

バス停で彼女に顔を合わせる機会は三回程あったけれど、その時程心が安らく瞬間は無かった。

彼女の指のサイズは聞いている。どんな指輪にするかは、俺のセンスで選んだ。

彼女にきつと似合うであろう指輪。それがどれ程値段の張るものであったかは、もはや関係の無い話だ。

ただこれは、自分の勇気を奮い立たせる為には絶対に必要な物。彼女への想いを、自分で再び強く感じるための、大切なモノ。

彼女の喜ぶ顔を見るための、大切な。

いつものバス停で、俺は彼女を乗せたバスの到着を待つ。

部活の集まりが今日はあるらしく、授業が無いにも関わらず、すみれちゃんは学校に言っているらしい。

現在時刻は17時2分。

12月のイヴの日だ。この時間帯でも、辺りは充分に暗くなる。

彼女が返ってくる時間はもう少し後なのだけれど、はやる気持ちと緊張感が、俺を早めにここに呼びだしていた。

いや、緊張なんてレベルじゃない。もはや、心臓が爆発でもしてしまいそうな勢いだ。

この、数年間秘め続けた想いを彼女に伝える瞬間なのだ。その動悸を、抑えられるはずがない。

車の前を通る度に、緊張感が高まっていく。

後何台の車が目の前を過ぎたら、彼女出会うことになるのだろう。

早くその瞬間ときが訪れて欲しい、けれどもずっと訪れて欲しくない。そんな矛盾した思考の渦の中、ただ淡々と時は過ぎていく。

見慣れたいつものバスの明かりが目に見えた。ああ、あれは彼女を乗せたバスだ。

覚悟というものは、もう既に決めてある。もしも告白を断られても、俺は潔く身を引くつもりだ。

今の俺にとつての一番は、彼女の幸せ。だから、その時の覚悟は決めてあるのだ。

後は、この想いを伝えるだけだ。

排気ガスを吐いたバスが、俺の目の前に止まる。

俺は知っている。このバス停で降りるのは、すみれちゃんだけだ。

だから、この扉が開いた時、真っ先に目に入るのはすみれちゃん。そう、それもいつもの通りだ。

プシューと音を立てて、バスの扉は開いていく。そうしたら目の前に見えるのは彼女の姿だ。

そう信じて何も疑わず、俺は伏せていた顔をあげた。

目の前に映るのは、暖かな笑顔を見せてくれる彼女の姿では、無かった。

「あれ、あんたが黒田踏樹っていう、すみれの先輩？」

そこにあっただのは、一人の高校生辺りの年齢の少年と、そしてその後ろにこじんまりと気まずそうに立っている、すみれちゃんの姿だった。

二人はバスから降りると、俺の目の前に立った。

俺は、混乱した。予想外だ。

どこまでも予想外だ。

固まっていた俺の気持ちも、この瞬間ばかりは流石に揺らぐ。

扉を閉じ、排気ガスをはためかせて過ぎ去っていくバスを見送った後に、俺はようやくその少年へと口を開いた。

「あ、ああ。そうだけど。そういう君は、すみれちゃんと同級生か？」

「まあ、そうとも言う。それよりも、もっと上の関係だけだね」

「……え？ちよ、ちよつと、達也くん!？」

驚きの声をあげるすみれちゃんの様子を認めるまでもなく、その少年の言葉に、俺の思考は止まりそうになった。

……こいつは何を言っている？上の、関係？もっと上の関係ってなんだ？それは、どういう、意味なんだ……？

俺のそんな狼狽した様子を認めてか、したり顔で言葉を続けようとする少年に、後ろからすみれちゃんは抱き着いて、それを止めようとしていた。

……なんだよ、そんな奴に、抱き着いたりなんかするなよ、すみれちゃん。

そんなに俺に聞かれたくない言葉でもあるのか？

一体どうなんだよ。何なんだよ。

「ま、見ての通り、俺とこいつは彼氏彼女の関係ってやつなんだ。今止めようとしているのは、当然あんに聞かれたくないことがあるからな」

その少年の言葉に、彼女は青ざめた表情になった。

そんなすみれちゃんの様子にも、俺は気をかけることが全く出来ない。

頭が、止まった。

心が、止まった。

感情が、止まった。

目の前が、真っ白になった。

まさか、そんなことが。そんなことがあって良いのか。

ここに来るまでの覚悟は、決意は、バイトにつき込んだあの時間は、この手の中の、小さな箱の中にある大事な指輪は。

全部、無駄なことだったのか？

「せ、先輩！……踏樹、先輩！違うの、これは、違うの！……どうしてこんな……！」

「すみれは黙ってな。要は、あんた。騙されてたんだよ、すみれに。彼氏も居るのに、高い指輪なんかねだっっちゃってまあ……。全くそこいらのギャルなんかよりも、余程怖い魔性の女だぜ、こいつは」

ああ、そうか。……もういい。もう、いい。何もかも、いい。聞きたくない。

これ以上聞いてしまったら、もう俺は戻れなくなってしまう。

この男が、本当に憎くて殺してしまいたいそうになる。

「そうか。分かった。末永く、幸せにな、すみれちゃん……と、その彼氏さん。俺はちょっと、疲れたから今日は帰るよ。それじゃあ、な。すみれ」

多分、これは決別。もう俺が彼女に会う事なんてないだろうと、心に思った俺がすみれちゃんにかけた、決別の言葉なのだ。

大好きだった、本当に心の底から大好きだったすみれちゃんは、もう消えたのだ。

例えば彼女が俺を騙そうとしていた訳では無かったとしても、彼氏がいるという事実は変わらない。

彼女があいつを選んだというのならば、俺がそこに割り込むことはするべきじゃない。

何よりも大事なのは、彼女の幸せだ。

それを俺がぶち壊すことになるのなら、それは本当に俺が望む所では無い。

指輪の入った小さな箱を握りしめ、俺はすみれちゃんとその彼氏に背を向けると、一度も振り返ることなく。あても無く、走り出した。

ゆっくりと歩みをもって自宅に帰れたら少しは格好もつけれるのだろうけど、生憎様、今の俺にそんな余裕なんてあるはずが無かった。

走り出した俺の姿を見て、すみれちゃんがどんな表情をしていた

のかは知れない。

知りたいような気もしたけれど、そんなことをしたらまた何もかも崩れ去ってしまいそうな気がして。

クリスマスイヴのイルミネーションが辺りを照らす街中をも俺は走り抜けた。

人目も憚らない、俺なりの全力疾走。前は涙で見えやしない。

歪んだ視界を映し出す自分の眼とその涙腺の不甲斐なさに、どうにも自分は心を折られた。

走り続けて20分も経つと、流石に俺の息も完全に切れた。

涙を袖で拭い、ふと顔をあげると、自分が居るのは大きな橋の歩道の上なのだ気付いた。

ここはこの街で一番大きな橋の上だ。

下に見える河川敷の上に、大きな歩道と車道が広がる、隣の町とを結ぶ赤い橋。

風当たりは強く、とても寒い筈なのだが、走りきって身体が火照っている今の状態では、そんな風が寧ろ心地よく感じられる位だった。

暖かくて燃えるように自分の中を駆け巡っていた彼女への思いが、瞬間的に冷め切ってしまったように。

今のこの熱い身体に当たる風の涼しさも、暫くしてしまえば凍える位に冷めたものになってしまうのだろう。

そんな風に思うと、また眼がしらには涙が込み上げてきていた。

俺は歩道橋の隅に身体を寄せ、両腕をガードレールの上にもたげて下を眺める。

ああ、今この下にある河に飛び込んだなら、きつととんでもなく寒いんだろうな。

そんなことを、何気に思うだけ。他に何も考えることも無かったし、それ以上に、何かを考えたく無かった。

溜息を吐きながら、右を見てみる。

綺麗な街明かりを見せる、クリスマスイヴの夜の景色がその先にはあった。

一体、どれだけの恋人達があの街で楽しんでいるのだろう。一体、どれだけの愛がああ街には溢れているのだろう。

一体、どれだけの。

うつろな目で、俺は再び河川敷に目をやった。あれだけ心地よかった風も、数分も経てば寒さに変わり始めた。

そんな折だった。ふいに一枚の紙切れが、俺の目の前を横切った。それが何の紙だったのかは知れない。

何かの広告だったかもしれないし、もしかしたら誰かの会社の大事な書類だったのかもしれない。

ただ、何も考える余地の無い俺にとっては少し興味があるのものです、その紙が河川敷の下へヒラリヒラリと舞い落ちていく様とぼんやりとでも眺めようかと、橋のガードレールに少し足をかけて下を覗きこもつとしたその瞬間。

どこからか少女の声らしき、怒声が飛んできたのだ。

「ちょっと、あんた！その足をかけているあんたよ！何してるの！？死に急ぐのは止めなさい！私の眼の前で死んだりなんかしたら、それこそ私が殺してやるんだから！」

そんな事を叫ばれてから五秒後位に、自分に向けてその少女が叫んでいるのだと気付いた俺は、その声がどこから飛んできていたのか探そうかと辺りを見まわした。

するとこの橋の反対側の歩道に一人の少女がいるのを発見した。

見た限り、中学生と言った年齢の子だろうか。

物凄く目が良い方でもないのではつきりとその姿を見ることは出来ないが、厚手のセーターで身をくるみ、暖かそうなマフラーを首に巻きつけて、頭のとっぺんに丸い白い球を付けたサンタさんミット帽を被っている少女のようだった。

「あんた、そこから一步も動かないでよ！今から私がそこに行くから、そこで待ってなさい！」

腕を振りかぶって、力の限りと言わんばかりに声を張り上げている様子の少女の姿が、橋上の車の大通りを挟んだ距離でも見て取れた。

言われた通り、俺は橋に右足をかけたまま一步も動かない。

微動だにせず固まっているとドンドン寒くなって身体は冷えていくのだが、今だけはその寒さの感触を少しだけ愛おしんでいた。

それから五分程経った辺りか。

どうやら橋の入り口まで行ってこちら側の歩道に渡ってきたらしいその少女が俺の右側に立っていた。

その少女の姿を横目に見て、俺は非情に驚くこととなった。

その大きな黒い瞳に、はっきりとした意思を持った鋭い眼光。

それで有りながら涙をうるわせている、その憂いげな瞳。

魅力的な形をした、ぷつくらとしたピンクの唇。筋の通った小さ

な鼻。

寒さに火照った可愛い頬に、整った小さな顔。

こんな美少女が、この世の中には居たのか。

そんな驚愕が、俺の中を駆け巡った。

すみれちゃんも勿論可愛かった。けれどもこの娘はすみれちゃんとは違う、本当に純粋な綺麗な可愛さを持っていた。

大和撫子のような艶やかな黒髪に、切れ長の瞳を持つすみれちゃんは、美人という表現が似合っていたけれど、この少女は違った。

ただ単純に、愛らしい。

そんな印象を持たせてくれるような、そんな雰囲気とその容貌は放っていた。

「……本当に一步も動かないなんて、自殺願望者にしては意外と素直ね」

「まあ、な。心も想いもやる気も元気も、完全にそがれちまったし、何かをしたたって気持ちも沸くわけでもなかったし。生きる目的も見失った感もあったから、もうどうでも良くなってるな。君の言う事を聞いてみてもいいかなと思ったんだよ」

だが俺は、この少女が言うような自殺願望者とまではいつていない。

ただ橋の隅で呆けていただけであって、ここから飛び降りようと言うマイナスな勇気が湧いていたわけでは無いのだ。

「ふーん。ホント、素直なのね。あんた」

「いや、今日は特別だよ。今日ほど素直になれる位に心がぶち折られる日なんてないだろうしな」

「そっか。じゃあ、もう一つ私の言葉を聞いてくれる?」

「なんなりとどうぞ」

「じゃあ、橋にかけたその足を下ろして、こっちを向いて」

了解、と一言添えると、俺はかけた右足を下して橋のコンクリートの地面を踏んだ。

横向きになっていた身体を、その俺の頭一つ分低い少女の方へと向ける。

そして涙の乾いたその瞳で、出来る限りの笑顔を見せてやった。第一印象はとても大事だと言う。

俺は初対面の相手には笑顔を見せることを心掛けていた。

まあ表情も何もかもが歪んでるだろうから、今の俺が上手く笑えてるはずは無いだろうけれど。

「随分と気持ちの悪い笑みを浮かべるのね、あんた。……でも、ただ暗い顔をして塞ぎこむよりは、その顔の方がずっといい」

「そうかい。そういつて貰えると、俺も少しは助かるよ。こんな不格好な笑顔、誰に見せても殴られそうな気さえしてるからな」

「……ねえ、あんたには生きる目的が無いの？」

「おい、あんたあんたって余り言つな。俺には黒田踏樹っていう立派な人間の名前がある」

「そう、じゃあ言い直すわね。フムキ、あんたには生きる目的がある?。」

生きる目的、か。

考えてみれば俺の生きる目的は、すみれちゃんそのものだったのかも知れない。

生活の基準も、行動も。小学六年の時に彼女が来てからずっと、彼女の為に俺は生きてきていたような心持さえする。

どの位テニスが上手くなれば彼女に褒めてもらえるだろうかとか、何時に大学を終えれば彼女に会う時間になるだろうかとか、此度のバイトのことだつて。

それが今日、たった数十秒の間に崩れ去ってしまったのだ。

すみれちゃんこそが俺の生きる希望で、俺の生きる目的だったのは間違いない。

それを失ってしまったのだから、俺にはやはり、生きる目的が完全に欠落しているのかもしれない。

身体の芯から底まで、ぽっかりの大きな穴が空いてしまっているかの様な、虚無感、虚脱感。それが今の俺を包み込んでいるようだった。

「ああ、無いね。どうしたって、今の俺には生きる目的が無いみたいだ。それ失ったのが今日でさ。ホント、何もかもが空っぽな気がするよ」

「そう。なら、良い話があるわ。乗らない？」

「話を聞く前から話に乗れって？そりゃ難しい」

「いいじゃない。どうせ今は空っぽなんですよ？だったら、きっとフムキは話に乗るわ。だから、死ぬなんて考えはもう捨てて」

「ありゃ、そういえば俺がまだ自殺をしようとしていたと勘違いしていたのか、この娘は。」

けれど、あながち間違いでないかもしれない。

今後も長きに渡ってすみれちゃんに代わる生きる目的、俺の人生を支える根元が見つからなかったら、本当にそんな道に走ろうとしてしまったかも知れない。

そして俺の頭一つ分低いその少女は、見上げて真っ直ぐに俺の瞳をとらえて、この言葉を俺に伝えた。俺がきつと、生涯忘れないであろう大切な言葉を。

「私がフムキに、生きる目的を与えてあげる」

とまあ、ここまでつらつらと事の始まりを書き綴ってみたわけなのだが。

運命なんてものは数奇なもので、そんな存在なんざ全くと言っていいほど信じてこなかった俺だったが、この時ばかりは。

そんなものを信じていいかもしれないだなんて腑抜けた考えを持ってしまったのも、それは到底無理もない。

枯れた大地に芽が花開くまで、少し時間はかかるけれど、ちゃんとした栄養と水と、そしてほんの少しの太陽の光があるならば。

枯れた心にや、花が咲く。

カードゲーム / 『Battle Days』

「それじゃあ、この部屋で待ってて。今お茶でも持ってくるから。別に辺りの物を物色しても良いけど……、あんまり散らかさないでよね」

「あ、ああ。分かった」

全く、一体何ということだろうか。

今現在俺が居るのは立派な一階建て一軒家の和室。掛け軸やら何やらと、どうにも日本を象徴するような、なんともまあ純朴な畳の座敷の上で炬燵に入っているほほんとしている。

ここは先程出会った少女の家であり、一応は客として扱われているのか、その少女は今しがたお茶を用意すると言ってこの部屋から出て行った。

現在時刻は19時をまわり、完全に辺りは暗くなっている。

この少女の住む家は、我が家からはかなり離れた所に位置してお

り、自転車を全力疾走でこいで15分位でようやく辿り着くんじやないだろうかと思える距離がある。

クリスマスだというのにこの辺りの家々のイルミネーションは素朴で、二個先隣の家がツリーを外に飾っていた位のものだった。

それにしたって、おかしなものだ。憔悴しきった状態の俺にこんな出来事が舞い降りるとは。

だが正直、本当に助かったと俺は思っている。あのままの精神状態で外を出回り続けたら、ふらふらとして一体どこに寝宿をつくっていたかも分からない。

あんな状況で家に帰るのも気が引けたし、何よりなりふり構わず走った分だけまた歩いて帰宅するというのも、相当な時間がかかるが故に面倒だ。

恐らく我が家では俺より四つ年上の兄貴が彼女とやらを連れ込んでクリスマスイブにするような行為をいたすのだろうし、この辛い気持ちを落ち着ける空間等提供されるはずも無いだろうことを思えば。

今あの少女の家に招かれたことは、本当に思いがけない幸運であ

り、まさしく僥倖であると言える。

ふむ、全くもって良い一軒家だ。外観をもつてしても中々に荘厳であったが、二階というモノの存在を取っ払って、有り余る長さの一階建てを作り上げている。

今自分が居る和室にたどり着くまでに、それでも長い廊下と数個に渡る和室を横切ったのだ。

もしかすると、あの少女は相当なお金持ち、或いはお嬢様というものなんじゃないだろうかと勘繰ってしまう。

家先の苗字を飾る石性の標識に書かれた文字を見るに、彼女の姓は桜井と言っらしい。

どうやら今日は彼女の両親はこの家に滞在していないらしく、クリスマスイブだと言うのに彼女一人にこの家を預けて留守なのだと言っ。

全く、あんなに可愛い娘をこんな夜に置いて二人留守とは。どんな親なのだろうか。

さて、あの少女が戻ってくるまで少しの時間はあるだろうし、

言われた通り少し物色でもしてみますか。

部屋の真ん中に置かれた四角い炬燵の中から足を出し、地面に足と手を着いたままずりずりと辺りにある物に近づいてみる。

まず最初に目に入ったのは、恐らく麻雀牌が入っているであろう黒くて四角い箱。

炬燵のある部屋には確かにあってもおかしく無い物ではあるが、一体どのような人物がここで白熱した戦いを繰り広げているのだろうか。

大方この炬燵の上の板をひっくり返せば麻雀用のマットに早変わりするのだろう。

もし機会があれば、この部屋打ってみたいという気がわかないことも無い。

そして掛け軸の隣に位置する、大きなテレビに目が行く。

大画面のテレビともなれば奥行が相当あるものなので、それをすっぽり嵌めることの出来る部屋のくぼみの広さは一メートル以上ありそうだ。

そして次にそのテレビの下にある物に目が行った。ん？これはもしかして、MSX2か？

うおっ、横にあるソフト、今年発売したメタルギア2とかいうゲームじゃないか。しかし、こんなものが一つ八千円近くするとは…。

ゲームなんてやったことも無い俺には、その楽しさがまだ理解出来ないのだが。けれども凄くやってみたい気もする。

まあ、暇であるし、取り敢えずテレビでも付けようかとリモコンに手を伸ばした辺りで、障子を開く音がした。

どうやらあの少女が戻ってきたようだ。その手に持つお盆には、恐らくお茶とお菓子が乗っているのだろう。

「ごめん、少し遅くなっちゃった。お茶っ葉が切れてて、新しい袋から開けてたから……」って、ああ、珍しい？それ。MSX2。なんかヒマだろうからって、お父さんが三、四カ月前に送ってきたの。メタルギア2ってゲームも一緒に入ってたのだけれど、それ、まだやってないのよね」

「ああ、まあ、珍し入っっちゃ珍しいな。俺の周りでゲームをやってる奴がそんなに居ないし、持ってるたつてファミコン位だろうしな。にしても、高い贈り物だな。君の家は金持ちなのか」

「……わかんない。でも、世間一般に言ったら、裕福な家庭の範疇には入るのかもしれないわ」

「そうか。でも、こんなクリスマスの日に中学生の娘を一人残すなんて感心は出来ないけどな」

「……まあ、それはね。仕方ない事、だから。あれ？どうして私が中学生だって知ってるの？」

流石に見た目で大体の想像はつく。まだ成長はしきつてないだろうその容姿からして、中二か中三位だと俺は予測する。

その旨を伝えると、少女は納得したように頷いた。

「ま、それもそうか。まだまだ私も大人には遠いなあ。因みに私は中学三年、15歳。ねえ、じゃあフムキは今何歳なの？高校生？大学生？」

「俺か？大学生だ。年齢は18。まあ、免許も取れる年齢になって

るし、もう大人と言えば大人なのかな」

俺はこの年の夏に既に免許は取得している。

幸運なことに担当の教官が大分甘い人だったことと持ち前の運転スキルのお蔭で、予想していたよりも随分と早く自動車学校を卒業することが出来ていた。

余計な課金がされなかった事は、素直に嬉しかった。

その時はまだバイトもしていなかったし、全て親からの出費だった為に、余りに無駄は負担もかけたくは無かったのだ。

「ふーん。私より三つも年上なんだ。しかも大学生。ちょっと羨ましいかも」

「おいおい、別に羨ましいことなんて無いぞ。大学生なんて適当に出席して単位をとって、後は先輩と飲み会やら麻雀やらでバイトやらで時間を潰すだけの職業だからな」

「それが良いじゃない。私からすれば、それが羨ましく思えるの」

そう言っつて、ここでようやく少女はお盆を炬燵の上に置いて、そして座り込んで炬燵の中に足を入れた。

俺もそれに倣い、炬燵に再び戻る。

そういえば彼女はてっぺんに白い球の付いたサンタ帽を被ったまままだ。

一応はクリスマスの雰囲気味わおうと思っつているらしい。

俺は手に握つたままだったりリモコンの存在に気付き、テレビを付けた。

今はバラエティ番組の時間帯らしく、テレビの中では笑い声の響いている。

そういえば今日は月曜日。

先週までは月曜日は21時から始まる『すてきな片想い』というドラマがやっていたのだが、バイトが忙しくなつてからは見ていなかった。

だが、そのタイトルを考えるだけでも精神的にくるものがあった。

これは洒落にならない。本当に片思いを実感した丁度当日に、思い浮かべて良いタイトルじゃない。

片想いの、なにがすてきなモノか。辛いんだよ、この野郎、と心の内に愚痴を言わないではられない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1103y/>

Battle Days !

2011年11月1日00時18分発行